おたふく物語　楽天旅日記

新潮社版

たふく物語
天旅日記

本周五郎全集

第三二巻

© Kin Shimizu
Printed in Japan 1982

外箱図・「裂織丹前」部分
本扉絵・乾山「絵替土器皿」より

山本周五郎全集第三巻　定価一六〇〇円

おたふく物語・楽天旅日記

昭和五十七年一月二十日　印刷
昭和五十七年一月二十五日　発行

著者　山本周五郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
業務部（03）二六六―五一一一　編集部（03）
二六六―五四一一　振替　東京四―八〇八

印刷所　錦明印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社

乱丁・落丁本は小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

花筵　五
おたふく物語　八三
楽天旅日記　一五一
附記　三三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おたふく物語・楽天旅日記

花筵

一の一

お市は十二三の頃から春さきになると眼を病む癖があった。陸田へ嫁に来てからのおちつかない暮しで今年はつい忘れていたが、お城の桜が咲いて間もなく良人に「眼が赤い」と云われ、鏡を覗いてみると果してまたいつもの病いが始まっていた。いったい彼女は眼の性が悪いというのだろうか、少し根をつめて縫物をしたり細かい字の本を読過したりすると、すぐに涙が出てきたり瞼が痙攣したりする。それを構わず続けていると霞でも懸ったようになって、暫く不自由することが珍しくなかった。

「それではもう針を持つのはおやめなさいな」姑の磯女はこう云った、「そうでなくっても身重になると眼にひびくものですからね」

「わたくしのは小さいときからの癖ですもの、それにこの季節さえ越せばしぜんと治ってしまうのですから……」

来てまだ七月という遠慮もあるが、そればかりではなくお市には一種の自信のようなものができていた。陸田の人間になってから月日が楽しく、明け昏れが緩みのないあかるくひき緊まった雰囲気に充ちていて、軀も心も伸びのびと息づき始めたように思える。里にいたときに育ちきらずにいたものが、こっちへ来てからにわかに成長を始めたという感じなのだ。それには里の家風が厳し過ぎたこともあるし、五人きょうだいの末のおんなで、必要以上に大事にされたこともあるだろう、ちょっと風邪をひいたくらいでも三四日は寝かされ、見えないほどの棘を刺しても医者が呼ばれるという風だった。元もと余り丈夫なほうではなかったが、そのために自分でも軀に自信がもてず、ごくつまらない故障にも神経を遣うような習慣がついてしまったのである。陸田ではそれとはだいぶ違っていた。良人の信蔵をはじめ姑の磯女も義弟に当る辰弥も、いったいが暢気なうえに淡泊な性質で、めったに物事にこだわるということがない。武家には珍しいくらい明けっ放しで、肩肱を張るような風はどこにもなかった。世間では嫁してゆくと当分は気苦労が絶えないというし、お市にしてもその感じがまったく無かった訳ではないが、それはごく短い日数のことで、家族の気質がわかると同時に世間の例とは逆な、まるで解放されたような安らぎを感じたのであった。ひきやすかった風邪もひかなくなり、手足にも肉が乗ってきたようである。眼の病み癖なども軽く済むに違いない、ごくしぜんにこういう自信がついていたのであった。

　磯女は「それならいいけれど、でも無理をなさらないように」と云っただけで強いはしなかった。その夜のことであるが、義弟の久之助がみつけて独りでりきみだした、「お母さんは暢気だからいけません、世間の嫁さんならもう針なんか持たされはしない、あね上だってそうだ、もう細かい仕事なんか拋って、早く医者にみせなくてはいけないでしょう、冗談じゃありません」こんなことを云っていきまいた。

「久之助さんはたいそう精しいのね」磯女は笑いながら三男を見た、「でもあなたの云うのは産後のことでしょう」

「へえー、産後ですかね」

　いきまいた顔で衒れたように、すばやく兄たちを見る眼もとが可笑しかった。信蔵はにが笑いをして「なにしろ早合点だからな」と云い、辰弥は眼尻の下った円満な顔で頷いていた。こんな些細なことにも三人の気質がよく表われる。信蔵は口数も少ないし総体もの静かで、眼に見えないところに注意のゆき届くという風だ。二男は軀も顔もまるまると肥え、どっしりおちついて、いつも唇のあたりに微笑を湛えている、肥えているためだろうが立ち居も億劫そうだし、口のきき方も暢びりしたものだ。そればかりではなく云うことが突拍子で、つい笑わずにいられないようなことが屢々あった。いつだったろう笹巻なにがしという槍組の友達が亡くなったとき、まだ病んで寝ている積りで見舞いにいったのだが、帰って来てそれを伝えるのにこういうことを云った、「病気はたしかなもんだったそうだけれどもねえ、看病に手を尽したら割合い死んじゃったってさ」これには良人の信蔵も磯女も笑わされてしまった。久之助はこういう場合に決して黙ってはいない、そのときも辰兄さんの話は禅の公案より面白くっていいと囃したてた、「病気はたしかなもんだったなんてちょっと俗ばなれがしているじゃありませんか、なにしろ看病に手を尽したら死んじゃったんだからな、詰り看病なんかしなければ助かったかも知れなかったんだ、なかんずくこの割合に死んじゃったというところなんぞ壮厳なもんですよ」辰弥のほうは尻下りの眼を細くしながら、まるで他人のことでも聞くように黙ってにこにこするだけであった。その翌日のことだったろうか、久之助は出仕しがけに次兄の顔を見て「今日あたり笹巻では割合い葬式をするんじゃないんですか」と云ったが、それから「割合」という言葉がよくみんなの口にのぼったものだった。こういう揚げ足取りとせっかちと負け嫌いはいかにも三男坊という感じがよく出ている。口もよくまわるがすることも機敏で、兄弟の中ではいちばん甲斐性者と云われていた。現に次兄が二十四でまだ部屋住なのに彼は二十二で御蔵方へ勤めている、これは収納奉行の古原忠太夫という人にみいだされたのであるが、それから二年あまり経ち、古原が江戸詰の用人として去った後で

も、役所の評判はなかなかよかった。お市が嫁して来て始めに馴染んだのも久之助であった。年からいえば彼のほうが四つも上なのだがそんな風は少しもみせず、なんにつけても「あね上——」あね上とよく気をつけて呉れる。なにしろ来て十日と経たないうちに部屋へやって来て小遣をねだったくらいだから、こちらの気持もうちとけてゆくのが自然だったろう、その後も十日おきくらいには小遣をねだられるが、お市は母からかなりの額の金を貰って来ているので、いつも笑いながら出してやるのである。

「なんにお遣いなさるの、もし必要なら少しは纏めて差上げても宜しいのよ」

「なにこれで結構です、小遣というやつは少しずつ頂くところに味があるんですからね、いまにわかりますよ」

こんな問答もあって今でもまだ続いている。本当なら彼は役料もはいることだし、まだ部屋住の辰弥こそそのくらいのことはあってよい筈だけれど、これはもう泰然自若たるもので弟のすることを感づくだけの気まわりもない、もちろん良人も磯女も知ってはいなかった。

軽く済むだろうと思っていた眼はやっぱりはかばかしくなく、例年のような経過をとるのだろうか、四五日すると頻りに涙が出はじめたので、いちおう細かい仕事は休むことにし、ながい掛りつけの石岱さまという眼科へ治療に通い始めた。治療といっても洗って点眼するだけなので、四五たび通った後は下僕に薬を取って来させ、里にいた頃のように自分で刻を定めてやるようにした。眼のほうはそんなことでよかったが、毎日の手持ぶさたにはほとほと困った、娘でいたじぶんにはまるで無頓着だったし、隠れてはずいぶん本なども読み兼ねなかったものだ。けれども嫁の身となればそう引籠ってばかりもいられないし、そうかといって縫物などをしている姑の側でぼんやり眺めているのも具合が悪かった。朝のうち一刻ほどすれば片付けものは済んでしまう、召使がいるから食事のまえあともこれといって手を掛けることもない。時どき姑の部屋へいって茶を淹れながら少しばかり話すのだが、多くは自分の部屋の窓際に坐ってぼんやり庭を眺め暮すのである……こういう身の置き場に困るような退屈をもて余していると、里の奥村から使いがあり母が病気で寝ているから顔を見せて貰いたいと云って来た。正月に訪ねたきりだし折よくいとまの多いのを幸い、磯女の許しを得てすぐゆくことにしたが、見舞いの品を調えたり着てゆく物に迷ったりしているうち午近くになってしまった。

「おくれついでに午を済ませていらっしゃい、これからだとあちらへ御迷惑を掛けるでしょう」

「そんなことはございませんけれど、では頂いてまいりましょう」

磯女とこんなやりとりをしているところへ思いがけなく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

久之助が下って来た。彼は挨拶の声をかけながら廊下を通り過ぎようとして他処ゆき姿の兄嫁をみつけ、「やあおでかけですか」と立止った。そして里からの使いで母の見舞いにゆくということを聞くと、なにか腑におちないことでもあるように首を傾げ、それからすぐ思い直したという風に、「今日のうちに帰っていらっしゃるんでしょうね」

こう云いながらじっとこちらの眼を見た。もちろんその積りでいたのだが、彼の調子にどこやら念を押すような響きがあったので、お市は咎められでもしたように夕方までには帰ると答えた。

「貴方はどうなすったの」磯女が三男のほうを見て云った、「たいそうお早いようだけれど加減でもお悪いんですか」

「なに午後に同僚の集まりがあるんです、急ぎますからすぐ食事の支度をさせて下さいませんか」久之助はこう云ってゆきかけたが、もういちどお市へ振返ってこんどはごくあたりまえな調子でこう云った、「あちらへおいでになったら皆さんに宜しく、特に弁之助さんには星宿譜の拝見できるのを待兼ねていると伝えて下さい」

「せいしゅくふ……というのでございますか」

「ええそう、東七宿三十二星とか、北七宿五十一星とかいって二十八宿の星座を譜にしたものです、そう云って下されればわかりますよ」

弁之助というのは四番めの兄であるが、そんな事を調べているという話は聞いたことがなかった。然しそのときは妙なことを始めたものだと思っただけで、かくべつ気にも留めず巽御門下の家をでかけた。日のつよい時刻でもあり気温も高く、青傘をさしているのに少し歩くと汗ばむくらいで、旱り続きのすっかり埃立った道をゆくのはかなり辛かった。奥村へは大手さきをまわって殆んどお城を半周しなければならない、そういっても大した距離ではないのだが、乾いた道から反射する光が病んでいる眼にしみるので、少しいっては立止って紅絹ぎれで涙を拭いたり眼をふさいで休んだりするために、思いのほか時間を取ったし、ゆき着いたときには肌の物をすっかり取替えなければならないほど汗をかいてしまった。

一の二

奥村へ着くとまず小間使のたみに湯をとらせて風呂舎へはいった。たみは顔のしゃくんだ十七になる農家の娘で、気はしの利くことも年に似合わないが、図抜けたお饒舌りの面白さがお市の気にいりだった。黙って聞いていると舌のやすむひまもなく饒舌る、纏まったことを云う訳ではなく唯もうそれからそれへと饒舌ってさえいれば満足だというように……生れて育った村の風俗や行事は幾たび聞いても飽きなかった、なかにはかなりいかがわしい話もあって

こちらの顔が赤くなるようなばあいでも、当人にはごくあたりまえなのだろう平気な眼をして話し続けるのである。尤もそれさえ順序や纏まりがある訳ではなく三から一へ戻り五から八へ飛ぶという風で、しまいにはなにがなにやら自分でもわからなくなり、欠伸をしながら居眠りを始めるというのが定っている例であった。

「まあずいぶんお肥りあそばしましてございますね」風呂舎へはいると早速こう云ってたみのお饒舌りが始まった、「おむなぢが見違えるようではございませんか、このまえお流し申しましたときにはおこぶし程もございませんでしたのに、お背もお腰まわりもまあまあ」

「そんなに軀のことを云うものじゃないよたみ、恥ずかしくなるじゃあないの、その湯を半挿へお取りな」

「こんなにお美しくいらしってなにがお恥ずかしいものでございますか、そんなことを仰しゃれば若奥さまなぞはあなたまるでもう……」

加世という長兄の嫁のことから兄たちの動静、家士の誰それに子が生れたこと、「太刀」という飼犬がすっかり老いぼれてしまったこと、酒好きのくせにすぐ酔うので有名ななにがしという客がこのあいだ広縁から転げ落ちて頭に瘤をこしらえたこと、自分に嫁のはなしがあるけれども相手が性なしということを知っているからゆく気はないこと、庭の芙蓉が今年は三本も枯れてしまったこと、更になにwant

に次にこれこれという具合で、汗を流し終り持って来た着替えを着てしまうまでには、正月以来この家にあった事をお市はすっかり知ることができた。耳ががんがんするような気持だったけれど、厳しい家風で自分の他にそんなお饒舌りを聞いてやるような者はない。おそらく溜めに溜めていたのだろうと思うと、可笑しさもてつだって叱る気にはならなかったのである。

母は畳んだ夜具の脇に坐っていた。血色も変らないし病んでいる人のようには見えない、兄嫁の加世がその側で茶や菓子の支度をしていた。

「おやおや、また眼が始まっておいでなのね」母はこちらの見舞いなどよく聞きもせずに眉をひそめた、「あなたのそれは一生の癖になってしまうのじゃないかしら、石岱さまへはいっておいでかえ、ふむ、こちらとはお違いだろうけれど養生をなさらないのでしょう、いつもよりはお悪いようにみえますよ」

細かい仕事などはずっと休んでいるし手持ちぶさたで困るくらいだと云ったが、母は信じ兼ねるという風にいつまでも痛わしそうな表情を解かなかった。父と上の兄ふたりは出仕して留守だったが、平三郎という三兄と弁之助とが間もなくそこへ顔を見せた。誰も彼もきちんとして、例のとおり袴の襞も崩さないという風である。話題も定りきったものだし無駄ぐちはきかないし、一杯の茶を啜るうちに

はもう話の種は尽きてしまう、……兄たちは程なく立っていったが、このあいだにお市はこの家の雰囲気に或る変化の起こっていることを感づいた。それは母や兄たちが陸田の容子を訊こうとせず、こちらが話しかけると明らかに避けるような態度を示したことである。眼を病んでも養生ができないのだろうという母の言葉にも、なんとなく棘を含むような調子があった。

「暫く泊っていって下さいね」母がふとこう云いだした、「これというほどの病気でもないのだけれど、なんだか軀にちからが無いようでね、このあいだから眠れない夜ばかり続いて心細くてしかたがないんですよ」

「でもそうはできませんわお母さま、陸田の許しも頂いていませんし、夕方までには帰る筈でまいったのですもの」

「伴れておいでの下女にそう言伝てお遣りになればよいし、後でこちらからも使いを出します、それにあなたもそのお眼では、少し悠くり保養をなさらなければいけませんよ」

「ええ……お母さま」お市はなま返辞をしながらさりげなく立った、「芙蓉が枯れたのですってね、虫でも付いたのでしょうかおねえさま」

「菊畑を弘げるのでお父さまがお移しあそばしましたの、雨があればよかったのでしょうけれど旱り続きがいけなかったのでしょうね、でも枯れたのは三本くらいでございますわ」

兄嫁の声を聞きながらお市は庭へ下りていった。奥村は老職の中でも裕福といわれている。武家のことで日常はごく質素だから暮し振にはみえないが、京の竜安寺のものを模したという石造りの庭や、豪宕という感じさえする家屋の建て方などにそれが表われているようだ。誇張して云えば五年にいちどぐらいの割で洪水にみまわれる土地なので、特にそういう造りを選んだのだと父は云うけれども、家具調度はもとより所蔵する軸物や、香、茶、華などの器物にも同じような好みがみえる。凡てが選りに選った重おもしく高価なもので、筋がとおらないとか価が安いというような品は一つも無かった。……お市が五つ六つになった頃だろう、「おんなの児には固すぎるようだ」と云って母屋の脇に花壇を造って呉れた。それからのち彼女はまったく中庭のほうは見ずに過したし、今でも覗いて見るほどの興味もない、この屋敷はどこもかしこも威儀を正しているという感じなのだ、花壇のほうへ歩きながらお市はこう思った。家も人も陸田とはなんと違うことだろう。壁には古い洪水の跡が幾段にも染付いているし柱には干割れがある、什器はみな年代とゆき届いた手入とで美しい艶を帯びているが決して価の高いものではない、床間には四季を通じて松を描いた墨絵の軸が掛けっぱなしで、骨董に類するような品は殆んど無いようだ。家族がそうであるように家の中ぜんたいがいつもさっぱりと洗ったように片付いている。お市

が嫁入道具として持っていった物、例えば呂宋わたりの油壺とか栴檀の櫛笥とか珊瑚や翡翠や玳瑁などの髪飾りとかいう物、その他こまごました手まわりの品じなや衣装などまで陸田の生活に相わない物が少なくなかった。お市の敏い気性からはそれが遠慮で、大抵は包まれたり長持に納われたりしたまま手を付けずにある。ごく平凡に考えてもそうせずにはいられなかった二つの家庭の「差」というものが、お市には今ふしぎなほど鮮やかに思い返されるのであった。それにしても陸田に対するこの家の空気の変ったのはなぜだろう、暫く泊ってゆけという母の言葉はどんな意味を持っているのか知らん。いやそれだけではない陸田を出るとき久之助が今日のうちに帰るかと訊いた、あのときの容子も平常とは違っていたようである、なにかあったに相違ない、これは単純な暗合ではない。……花壇の前まで来たときお市の気持はようやく不安になりだした。するとそれを待ってでもいたように中庭との仕切になっている網代垣に添って弁之助がこっちへ来た。彼はきょうだいの内いちばん骨細で皮膚の色も冴えない、眉間に深い立皺のよった陰気な顔だちをしているし、ふだんはごく温和しいが、いちど怒るとなると誰にも抑えられないような激しいところがある、お市には年が近いのでいちばん親しくして来た兄であった。……側へ寄った弁之助は眼をよそのほうへ向けながら「お母さんがなにか仰しゃったか」と低い声で訊いた。

「暫く泊ってゆくようにって仰しゃいましたわ」こう云いながらお市はじっと兄を見た、「……それがなんだか訳でもありそうにずいぶんきつく仰しゃいますの、その他にもちょっと気のついた事があるんですけれど、陸田となにか変ったことでもあったんでしょうか、弁之助兄さまはなにか御存じでいらっしゃいますの」

「すぐ陸田へお帰り」彼はやはり眼をよそへ向けたままだった、そして懐紙を出して唇をぬぐった、「これから当分は来ないほうがいい」

「来ないほうがって、……ではやっぱりなにかあったんですのね」

「無事におさまるだろう、お市が心配する程のことじゃない、お母さんには黙って帰るんだ、おまえ肥ったようだな」そこで初めて妹の顔を見た、「軀のほうにはなにも障りはないんだね」

「久之助さまからお言伝がございますの、星宿譜を早く見せて頂きとうございますって、待兼ねておりますからと仰しゃっておいででした」

弁之助はちょっと眼を瞠るようにした。びっくりしたとも怯えたともいう風な眼つきである。それから口の中でなにか曖昧なことを呟いたと思うと「すぐ帰るほうがいいよ」と云って来たほうへ戻っていってしまった。……まる

で訳はわからないが、不安は強くなるばかりだしいちばん気心の通じ合っている兄の言葉なので、お市は迷わずその忠告に従うことにきめた。母に黙って帰れという口ぶりが特に心をせかしたのである。供部屋に待っていた下女をさりげなく呼んで支度をさせ、自分はさっき着替えた妝をそのままで通用口のほうへ出た。汗になって風干しにしてある物を残してゆくのが厭だったけれど、取りにゆけば兄嫁の眼につかずにはいないので諦めた。幸い誰にも見られないで屋敷をぬけだしたが、それから却って怖いような気持になり、急に高く搏ちはじめた動悸と共に追われるような歩調で道をいそいだ。日ざしはやはり強いので少しゆくと涙が頻りに出る、お市は機械的に紅絹ぎれでそれを拭くが頭の中はあだ黝いほど不吉な想像でいっぱいだった。なにごとがあったのだろう、これからどんなことが起こるのだろう、お母さまには御挨拶をして来たほうがよかったのではないだろうか、星宿譜と聞いたとき弁之助兄さんはどうしてあんなにびっくりしたようなお顔をなすったのかしら、……なにもかもわからない、けれどもなにか異常なことが起こっているのはたしかだ。

「おまえしゃんとしないのね」お市はなんども下女をそうせかせた、「そしてもう少しお急ぎな」

一の三

三日ばかりは誰にうちあけようもない不安な気持で過した。良人や久之助の容子になにか現われはしないかと絶えず注意しているので、神経が労れるのだろう、なんでもない物音にとびあがるほど驚いたり、夜中にひどく魘されて隣りの部屋から良人に呼び起こされたりした。けれども案じたような事はなんにも起こらないし家人の容子にも変った風はみえなかった。……黙って帰った日にすぐ里へは使いを遣った、急に気分が悪くなったからという口上で。奥村の母からは置いて来た着物の包と「大事にするように」という返辞があり、その翌日もういちど使いの者が見舞いを述べに来た。また久之助には申し伝えましたとだけ云ったところ、これもそれはどうもと軽くうけながしたきりで、別に深く拘わるようなところはみえなかった。これらを思い合せてみるとすべてがごくあたりまえで、弁之助の言葉以外には確たる不安の根とみるべきものはないように思える。奥村の家の空気が違って感じられたのさえよく考えればあやふやになった。こういう気持と、五日、六日と無事に日が経ってゆくのとで、お市の心もしだいにおちつき、やがて月の変る頃には忘れるともなく忘れるようになった。

若葉の季節になってからお市は夜中に眼がさめて暫く眠

れない癖がついた。一刻ばかりのことだがすっかり眼が冴えてしまって、むりに眠ろうとすると軀が気味の悪いほど汗ばんでくる。そのうえどういう訳かわからないが、良人の顔を見たいという欲望が衝動のようにこみあげてきて、胸苦しいほどの気持になるのである。良人は襖ひとえ隣りの部屋に寝ていた。せめてその人のけはいか寝息でも聞ければと思うのだが、磯女なども感心するくらい寝相のよいひとで、どうかすると起きているのではないかと疑わしくなるほど静かな眠り方であった。はしたない気がしてはじめは我慢していたけれども、どうにも抑えきれなくなったので、或る夜そっと起上って間の襖を明けた。暗くしてある有明行燈の光が、掛け夜具を顎の下まで引き仰向きに寝た信蔵の姿をひっそりと照らしだしていた。面ながで肉の緊まった眉のはっきりした顔だちは、どこかに冷たいほどの意志の強さを感じさせるが、眠っていると唇のあたりもやさしくなり、長い睫毛の合わさっている眼もとや頬のあたりなど穏やかな温たかさが表われて、すり寄ってゆきたいような懐かしい想いを唆られる。……お市は喉に激しい渇きを覚えた。軀のどこかに灼けるような苛立たしさ、痛みのようなむず痒さが感じられた。すると突然まったくなんの理由もないのに、良人が自分という者に無関心でやがてはどこかへいってしまうのではないかという恐ろしい疑いが頭にのぼった。それは避けようのないほど決定的なものに思えた。そんなことはないと首を振ったけれども、ではおまえはその人にとってどんな人間なんだ、良人となり妻となることが二人の運命をそれほどたしかに結びつけているか、こういう言葉が眼に見えぬ者の叫びのようにお市の心をゆすぶった。――そうだ、夫婦とはどういうことだろう、良人にとって自分はどれほどの値うちがあるのだろう、自分は果して良人に愛されたことがあるのだろうか。お市は軀が顫えてきた。陸田信蔵という者が自分から遙かに遠い存在であって、二人をつないでいるのはごく脆いひと筋の糸でしかないということ、良人はこれまでも自分を愛しはしなかったしこれからも愛しては呉れないだろう、そしていつかは自分を去ってどこかへいってしまうに違いない……。

想像することの余りの悲しさに、お市はそこへ坐ったまま両手で眼を押えながら静かに啜りあげた。それが耳にはいったのだろう、信蔵が眼をさましてこちらへ向いた。すぐには声を掛けず訝しそうに暫く妻の容子を見ていたが、やがてごく穏やかな声でどうしたのだと云った。

「こんな時刻にどうかしたのか」

お市はとび上るほど吃驚してああと云った。それが途方もなく異様にみえたのであろう、信蔵は半身を起こしながらお市と呼んだ。

「どうしたんだ、軀の具合でも悪いのか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c